三重県護国神社奉賛会報

第七十二号

昭和天皇御製（昭和五十三年）

母宮のひろひたまへるまてばしひ
焼きていただけり秋のみそのに

奉賛会総会 10月16日(金) 午後2時開催

―平成二十一年度―
三重県護国神社奉賛会

『総　会』

開催のご案内

会員各位のご協力・ご奉賛をいただきまして、平成二十年度も恙なく終了できましたこと、心より御礼申し上げます。

平成二十一年九月一日より新年度に入りました。

つきましては、左記により「平成二十一年度」（平成二十一年九月一日～翌年八月三十一日迄）の総会を開催致しますので、多数ご参加くださいますよう、ご案内申し上げます。

尚、会員各位には、返信葉書を同封させていただきましたので、来る十月十日までに、出欠の有無をお知らせくださいますよう、お願い致します。

記

一、開催日　平成二十一年十月十六日
一、場　所　三重県護国神社
一、時　間　午後一時～
「受付」参集殿
午後二時～
「英霊遺徳顕彰祭」拝殿
午後二時三十分～
「総会」南参集室

会費納入のお願い

新年度『平成二十一年度』（平成二十一年九月一日～翌年八月三十一日迄）に入りましたので、新年度会費を納入頂きますようお願い申し上げます。

尚、納入の際は奉賛会専用の振込用紙をご利用下さい。

※送金手数料は奉賛会で負担いたします。

年度会費　正会員　二千円
　　特別会員　一万円

奉賛会入会のご案内

奉賛会は護国神社の御英霊を恒久的に奉慰奉賛していく事を目的とし結成され、多くの方々よりご賛同を賜って参りましたが、会員数が年々減少しているのが現状です。

そこで、一般有志の方の入会を進め、会員の増加を図りたく、会員よりのご紹介を宜しくお願い申し上げます。

入会ご希望の方は直接神社へお越し頂くか、奉賛会事務局までお知らせ下さい。

三重県護国神社内　奉賛会事務局
☎〇五九―二二六―二五五九

―― 英霊の言乃葉 ――

生後三ヵ月の息子への遺訓

陸軍中佐　沼田　正春　命
野砲兵第一聯隊
昭和十九年十二月二日
レイテ島リモン西南方面
にて戦死
神奈川県出身　三十一歳

大命に依り、父は沢山の将兵をお預かりして、更に更に難しい戦場に赴く事となつた。故に多忙中ではあるが一言申し述べて置く。

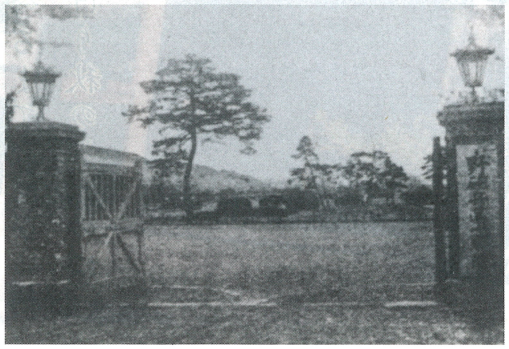
若し父亡くしても、節夫には立派な祖父母があり優しい母がある。お世話下さる叔父や叔母がある。又幾百年来の祖先がお前の事を一生懸命見てゐて下さるのだ。それ故、皆に有難く感謝しつつ安心して征くのである。祖父母や母の教へに従ひ清く正しく如何なる事にも負けぬ強さ優しさを持つて育てよ。父は、お前が生育し身を修め、家や家族を守り、立派に働く姿を夢みつつ発つのである。

父の骨は遥か南の果てに埋まるとも、常に常に、お前が生育する勇姿を見守つてゐる。

秋色濃き孫呉の平原に虫声も寂しく、北斗星は真上に輝き、月は興安嶺の彼方に傾く。冷気強き灯火の下、遥かにお前の姿が目に浮かぶ。どうか祖父母を大切に母を労るやう。他の事は祖父母様お母さんよりお聞きなさい。

【平成十七年八月　靖國神社社頭掲示】

英霊の言乃葉（9）より転載



野砲兵第一聯隊の営門。この聯隊を頭号部隊として、以後、多くの砲兵聯隊が造られた。

【野砲兵第一聯隊について】

沼田正春陸軍中佐が所属した野砲兵第一聯隊は明治五年、東京鎮台第三砲兵隊として創設、二十一年野戦砲兵第一聯隊と改称された。

日清戦争では二十七年八月動員下令、遼東半島上陸後ただちに金州城を攻略した。二十八年には聯隊主力蓋平攻略戦に参加。田庄台攻撃では日清戦争最大の砲撃戦を展開し、敵を圧倒した。

日露戦争では三十七年動員下令、第二軍隷下で南山の戦闘を戦った。

昭和十一年、二・二六事件直後に満州に派遣され北満孫呉に駐屯。十二年六月カンチャーズ島事件に第三大隊が出動し、七月帰隊した。

支那事変勃発と同時に七月混成第二旅団に第四大隊を配属。旅団はチャハル作戦に参加、十月復帰下令。十四年ノモンハン事件に第一・三大隊臨時動員下令、出動準備の最中に停戦となった。

聯隊は渡満以来北満の防衛に任じ、黒竜江岸で渡河・湿地訓練および冬季演習に精進し、まさに北鎮の重点兵団の地位にあったが、十九年に入り中部太平洋方面の戦場悪化に伴い、二月第六派遣隊編成下令。砲兵隊編成を山砲兵第十一聯隊とともに担当、聯隊から第三大隊を差出した。派遣隊はグアム島に派遣、同地で玉砕した。

聯隊も七月南方派遣準備を命ぜられ上海へ集結。第十四方面軍隷下となり、まずマニラ着。十一月レイテ作戦に参加、オルモック湾に上陸し、第三十五軍隷下に入りただちに北上カリガラ付近に進出せよとの命令を受領した。

状況はレイテ上陸の敵、四個師団第十六師団は圧迫され苦戦中、第三十師団、第百二師団の一部が増援中であった。十一月三日敵は舟艇機動でカリガラ湾に上陸、先遣歩兵第五十七連隊は不規遭遇戦を展開、兵力逐次使用で主導権を奪われ、これを奪回のため聯隊主力はリモン・カタバラ付近に陣地占領。十三日から射撃を開始した。

敵の制空権下で射撃も制限を受け、かつ彼我の火力差は大きく、悪条件下の戦闘で次々に火砲は破壊された。十二月十五日から敵の強圧で次第にリモン南方地域に圧迫され二十八日転進命令。火砲はほとんど破壊されレイテ西岸ビルアバ海岸へ撤退、その後二十年に入り残存兵力は北部セブ島へ転進した。

三月敵がセブ島上陸、聯隊は所在兵力をもってゲリラ戦を展開、自戦自活中に終戦となった。

師団正面の敵火力は五倍、この間聯隊は弱小砲兵をもって健闘するも刀折れ矢つき玉砕、伝統の頭号砲兵聯隊は終焉をとげた。

【日本陸軍機械化部隊総覧　より転載】